立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２００５年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　日本文学専攻		
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部・教授	小　峯　和　明　印	
自然・人文の別	自然　・　人文	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題名	南方熊楠と朝鮮の説話―今村鞆との関係から―		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・日本文学専攻博士課程後期課程４年	趙　恩　馝　印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
研究期間	２００５　年度		
研究経費	２００　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、一九〇〇年代のはじめの頃、日本と朝鮮の民俗研究が盛んに行われていた時期、南方熊楠における朝鮮への認識を熊楠邸に所蔵されている資料や熊楠と朝鮮の接点であったと思われる今村鞆との関係を手掛かりに調査及び考察を試みたものである。その過程で、熊楠における朝鮮の問題は、熊楠の数多くの論考が西洋文明に対し、東洋文明の特徴を明らかにしようとした立場から、東洋の中の「朝鮮」として認識していたことと考えられる。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　南方熊楠　〕〔　今村鞆　〕〔　朝鮮　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

熊楠が日本で活躍していた一九〇〇年代のはじめの頃、日本と朝鮮では民俗研究が盛んになり、活発に調査が行われた時期である。しかし、韓国の民俗学において植民地時代に研究・調査された朝鮮資料や民俗研究は植民地政策の一環であったことなどから、政治的な目的や歪曲されたものとして否定される指摘があり、その中で、しばしばとりあげられるのが今村鞆である。それは、今村が警官として朝鮮に赴任し、退職後も朝鮮総督府風俗資料編纂などに手がけていた職務的な立場上の問題として批判される。さらに、南根祐は（「朝鮮民俗学と植民地政策」『心意と信仰の民俗』（吉川弘文館、二〇〇一））、今村の民俗学が、「日鮮同祖論」を論拠の基礎にして、「鮮人の中良なる皇国臣民」化を目指し、「植民地主義民俗学」の展開に至大な貢献をしたとまでいうような状況である。

熊楠の朝鮮に関するほとんどの資料や情報の提供者であった今村へのこのような評価は、熊楠にどう影響されたかは重要であろう。しかし、熊楠においては、そういった政治的な観点や「植民地朝鮮」としての認識はあまりみられない。それは、民俗研究においての熊楠は、一つの主題に関連する話を広い地域やジャンルを横断しながら次々と自律的に展開させていく方法や、主に文献記録をもとにしている論考の特徴から見出せる。熊楠に送られている今村の書簡は、熊楠が今村に質問したものに対して、「金銭花ノ件」「虎ノ件」のように答える形式で書かれ、主に、朝鮮の植物や動物についてのものが多い。このような手紙のやりとりは、今村との交流だけではなく、熊楠と交流をもった他の書簡からもみられる特徴であり、熊楠の「もの・こと」に対する思想を顕わすものである。小峯和明は（『国文学―南方熊楠』（学灯社、二〇〇五）、熊楠における沖縄のとらえかたにおいて、「熊楠の焦点は沖縄の民俗習慣、生活、動植物の生態等々の文化や自然の学的総体にあり、そこにナショナル・アイデンティティをさぐるような姿勢はうかがえない。あくまで世界を相対化していく、その一環に沖縄があるにすぎない。いわば、異文化としての琉球を博物学的にとらえる基本線で終始一貫している。」と述べる。

熊楠における沖縄に対するこのような姿勢は、朝鮮に対する問題においても示唆深い。柳田や折口などがもとめた「日本で失われた原郷」としての沖縄に対する姿勢は、当時の朝鮮に対する民俗研究にみられる傾向でもあった。ここで、柳田国男と「比較民俗学」における見解の差で、しばしば比較される熊楠だが、朝鮮を対象にした時にもその違いが浮かび上がる。柳田国男の民俗学が「一国民俗学」として成立し、朝鮮を含む植民地への民俗を否定したことは、柳田の政治的な活動を隠蔽しようとする結果であると指摘されている。

研究成果の概要　つづき

熊楠においても、植民地に対する見解を述べるものは、あまり見られない。熊楠がアメリカやイギリスに滞在していた若い時期に比べ、日本に戻ってからは日本の政治や時勢に関する言及が少ないとの指摘もある。しかし、熊楠において、柳田の植民地に対する認識との違いは、柳田は日本を中心として考えていたことに対し、熊楠は西洋に向けての東洋としてとらえたことにあると考えられる。それは、鶴見和子（『南方熊楠』（講談社、一九八一））がいうように、熊楠が開陳したのは、ヨーロッパの思想や学問は普遍性をかかげているが、それは西ヨーロッパという局地における「普遍性」にすぎず、インドや中国や日本やアフリカなど、非西欧地域の思想や学問がヨーロッパを包摂することによって、より高次の普遍性にたつことができる、という考えである。すべては、熊楠の学問に対する姿勢に関わるものではないだろうか。このような民俗に関する認識は、熊楠が後に岡茂雄が作る比較民俗雑誌『ドルメン』（昭和七年～昭和十四年）に積極的に関わっていたことにも繋がる。『ドルメン』は当時、北海道・沖縄・満州・台湾・朝鮮などあらゆる地域の民俗に関する研究を集めたものであり、編集者の岡茂雄はこの雑誌刊行のために柳田国男と仲違いをしたと伝える（岡茂雄『本屋風情』（平凡社・一九七四））。

熊楠の研究は、単に柳田との「比較民俗学」に対する見解の差だけではなく、政治や思想にとらわれない意識的な研究方法から得たものであり、熊楠における朝鮮は、「失われた日本の原郷」でもなく、「植民地」としての朝鮮でもない、異なる思想や文化を持つ東洋の中の「朝鮮」として認識していたと考える。

※　この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。